

耶穌降生千八百八十六年 米國聖書

舊約  
聖書  
撒加利亞書

明治十九年

日本橫濱印行

02-KI

海老澤文庫

撒加利亞書

第二十三章

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

ある預言者セカリヤに臨めり云くニエホバの言イドの子ベレキヤの子  
怒りたまへりニ萬軍のエホバかく言ふと汝かゝらお告よ萬軍の  
エホバ言ふ汝ら我に歸れ萬軍のエホバいふ我も汝らに歸らん  
汝らの父等のごとくあらき前預言者等かゝらお向ひて呼  
りて言り萬軍のエホバのく言たまふ請ふ汝らろの惡き道を離れ  
ろの惡き行を棄て歸せと然るに彼等ハ聽す耳を我に傾むけさり  
きエホバこれを言ふニ汝らの父等ハ何處おわりや預言者等永遠  
に生んやハ然あむら我僕ある預言者等に我々命したる吾言どわ  
ぶ法度ど汝らの父等お退及たるに非ずや然ゆゑる彼らかへり  
て言り萬軍のエホバ我らの道に循むひ我らの行に循むひて我ら  
お爲んと思ひたまひし事を我らに爲たまへり○セダリヨスの

撒加利亞書

第一章

自一至七節

一

海老澤有道文庫



海老澤有道文庫

二年十一月すあわちセバチといふ月の二十四日エホバの言ハ  
 子のベレキヤの子ある預言者ゼカリヤが臨みり云くハ我夜觀  
 しに一箇の人赤馬に乗て谷の裏ある烏拈樹の中に立ちろの後に  
 赤馬、駁馬、白馬を乗我我主よ是等の何ぞやと問けるに我と語ふ  
 天の使わきふむかひて是等の何あるをわれ汝に示さんと語り  
 烏拈樹の中お立る人答へて言けるは是等の地上を巡ねく歩り  
 めんどてエホバの道に立たせし者なりと彼ら答て烏拈樹の  
 中に立るエホバの使に言けるに我ら地上を行めぐり觀しに地  
 り穩にして安しエホバの使こたへて言ふ萬軍のエホバよ汝い  
 つまでエルサレムとユダの邑々を恤ミたまひざるか汝えみれを  
 怒りたまひてすで七十年ありぬとエホバ我と語ふ天の使  
 に嘉言愚言をもて答へたまへり言かくて我と語ふ天の使我言  
 けるに汝呼りて言へ萬軍のエホバく言たまふ我エルサレム

のためレオンのため甚だしく心を熱して嫉妬おもひ安居  
 せる國々の民を太く怒る其に我すてしく怒りしお彼ら力を出し  
 て之に害を加へたきバありエホバかく言ふ是故に我憐憫をも  
 てエルサレムに歸る萬軍のエホバのたまふ我望ろの中お建ら  
 量繩エルサレムお張きんせ汝また呼りて言へ萬軍のエホバか  
 く宣ふ我邑々に再び嘉物あふれんエホバまたレオンを  
 慰め再びエルサレムを簡ひたまふべしと○かくて我目を舉て  
 觀しお四の角ありけき心を我に語ふ天の使お是等の何なるやと  
 問しお彼われお答へけるは是等のユダイスラエルおよびエルサ  
 レムを散らしたる角なりと平時にエホバが四箇の銀治を我に見した  
 せへり三我是等の何を爲んどて來ざるやと問ふに斯てたへたま  
 へり是等の角のユダを散して入あろの頭を擧めざりし者ある  
 が今この四箇の者來りて之を感しかのユダの地おむかひて角を

舉て之を撒せし諸國の角を擲たんとす  
 汝の何處へ往くやと問しハエルサレムを量りてその廣と長の  
 幾何あるを觀んとすと我に答ふ三時ハ我ハ爾天の使出行たり  
 し又一箇の天の使出行たりて之ハ會ハ口之に言けるハ走ゆき  
 てこの少き人に告げ言ヘエルサレムの中の人道畜と饑ある  
 によりて野原のごとく廣く亘るべシエホバ言たまふ我らの  
 四周にて火の垣となりその中にて榮光とあらんハエホバハ  
 まふ來れ來れ北の地より逃きたれ我らんぢらと四方の天風の  
 とくハ行わたらしむればなりエホバこれを言ふ七來キバヒロン  
 の女子どももに居るレオンよ遁き來キハ萬軍のエホバかく言た  
 まふエホバ汝等を擄へゆきし國々へ榮光のために我等を遣ハし  
 たまふ汝らを打つ者のハ彼の目の珠を打るよ心ありハ即ち我手  
 を

かきらの上に搖ん彼らハ己に事へし者の俘虜とあるべし汝らハ  
 萬軍のエホバの我を遣ハしたまへるなるを知んハエホバ言たま  
 ふレオンハ女子よ喜ビ樂め我きたりて汝の中に住バありと  
 日にハ許多の民エホバハ附て我民とあらん我らんぢの中ハ住  
 し汝ハ萬軍のエホバの我を遣したまへるあるを知んハエホバ聖  
 地の中ハユダを取て己の分とあし再びエルサレムを簡びたま  
 ふべしエホバ興てその聖住所よりいでたまへ凡る血肉ある  
 者エホバの前に肅然たむ  
 彼祭司の長コレニアガエホバの使の前に立ちサタンの  
 右ハ立てこれハ敵しをるを我に見すニエホバサタンに言た  
 るハひけるハサタンよエホバ汝をせむべし即ちエルサレムを簡び  
 しエホバ汝をいましむ是ハ火の中より取いだしたる燃柴あらす  
 やとコレニア汚あき衣服を衣て使の前ハ立をりしガエホバ



己の前まへに立たる者等ものどもに告つて汚きたる衣ころも服を之をに脱ぬせよと宣たまひまたヨ  
 ヲアに向むかひて觀みよ我われらんぢの罪つみを汝なんぢの身みより取とりけり汝なんぢも  
 美うつくしき服ころもを衣きすべしと宣たまへり我われまた深ふかき冠かんむり冕ををの首かぶに冠かんむり  
 とを言いひ是こゝにあいて潔けがき冠かんむり冕ををの首かぶに冠かんむりせ衣服ころもをこれに衣きす  
 エホバの使つかいの立たるをホエホバの使つかい證あかししてヨヨアに言いふ七なな萬まん軍ぐん  
 のエホバはあく言いたまふ汝なんぢも我われ道みちを歩あむる者等ものどもの中なかに往ま來き  
 を司つかさどり我われ庭にわを守まもることを得えん我われまた此こゝに立たる者等ものどもの中なかに往ま  
 する路みちを汝なんぢに與たまふべし祭まつり司つかさどの長ながヨヨアよ請こふ汝なんぢと汝なんぢの前まへに  
 坐まする汝なんぢの同どう僚りょうどもも聽きべし彼かれらの即すなはち前まへ表あらるべき人ひとら  
 り我われからず我われ僕こゝれを來きる枝えだを來きらずべしハヨヨアの前まへに我われが立たる  
 るどもろの石いしをかぶり此こゝ一いつ箇かんの石いしの上うへに七なな箇かんの目めあり我われ自みづからるの  
 彫う刻くをあらす萬まん軍ぐんのエホバはこれを言いふあり我われこの地ちの罪つみを一日いちにちの  
 内うちに除ぬくべし萬まん軍ぐんのエホバは言いたまふ其その日ひには汝なんぢ等らの互互あひま

お和な招まねきて葡萄ぶどうの樹きの下した無な花はな果くだの樹きの下したにあらん  
 我われに語かたへる天あまの使つかいまた來きりて我われを呼よび醒させり我われの匿かくれる  
 人の呼よび醒させしことありき我われにひかひて汝なんぢ何なにを見るやと  
 言いわれ我われいへり我われ觀みにたぬ金かねの燈あかり一いつ箇かんありてる頂いただきに油あぶらを容ゆる  
 る器うつわありまた燈あかりの上うへ七なな箇かんの燈あかりありるの燈あかりは燈あかりの頂いただきに  
 ありて之これに各おの々おの七なな本もとづの管つづみありきまた燈あかりの側わきに橄欖えんらんの樹き二  
 本もとありて一いつの油あぶらを容ゆるる器うつわの右みぎにあり一いつの左ひだりにあり我われ答こたへ  
 て我われと語かたふ天あまの使つかいに同どう言いけるに我われ主しゅよ是こゝ等らの何なにをやと我われと語かたふ  
 いふ天あまの使つかいに答こたへて汝なんぢ是こゝ等らの何なにあるをかぞいふに我われと語かたふ  
 我われ主しゅよ知しらずとわれ言いひて汝なんぢまた答こたへて我われに言いけるにセルセルバベル  
 にエホバの告こゝたまふ言ことは是こゝの言ことは萬まん軍ぐんのエホバはのたまふ是こゝは  
 權けん勢せいも由よしず能あたりし力ちからに由よしず我われ體たいに由よしありセルセルバベルの前まへにあたれ  
 る大山おほいよ汝なんぢ何なに者ものぞ汝なんぢの平ひら地ちとならん彼かれは恩めぐみ惠めぐみあれ之に恩めぐみ惠めぐみあ

れと呼ぶる聲をたて、頭石を曳いださん。エホバの言われに、  
 めり云く、セルバベルの手この室の石礎を置たり彼の手に  
 成終ん汝去らん萬軍のエホバ我を汝等に遣したまひしと、  
 小き事の日を觀禱ひる者や。夫の七の者は逼ねく全地を往來する  
 エホバの目あり準繩のセルバベルの手あるを見て喜こむん、  
 我また彼に問て燈臺の右左にある此二本の橄欖の樹の何あるや  
 と言ひ、重ねてまた彼を問て此二本の金の管によりて金の油を  
 ろの中より擣ぎ出す二枝の橄欖の何やと言しに、彼われを答  
 へて汝是等の何あるを知らせるかと言われを我主よ知すと  
 言けるに、言彼言らく是等の油の二箇の子にして全地の主の前  
 あり  
**第五節** 我また目を舉て觀しに、卷物の飛あり、  
 彼われに汝何を見るやと言われを我言ふ、我卷物の飛ふを見る、  
 其長り二十キユビ

よろの寛り十キユビト、彼またわれに言けるは、是は全地の表面  
 を往めぐる呪詛の言なり、凡て竊ひる者、卷物のこの面に照して除  
 かれ、凡て誓ふ者の卷物の彼の面に照して除かるべし、  
 萬軍のエホバのたさふ我これを出せり、是は竊盜者の家に入り、  
 また我名を指て偽り誓ふ者の家に入て、その家の中に宿り、  
 木の石とを並せて、  
 盡く之を焼べしと、  
 ○我に語へる天の使進み來りて、  
 我に言けるは、  
 請ふ目を舉てこの出きたれる物の何あるを見よ、  
 これ何あるや、  
 我言ければ、  
 彼言ふ此出來れる者、  
 エホバ外あり、  
 又言ふ全地において、  
 彼等の形狀、  
 是のごとせ、  
 かくて、  
 鉛の圓き蓋を取、  
 ぐれ、  
 一人の婦人、  
 エホバ外の中にお坐し居る、  
 彼は罪惡あり、  
 と言て、  
 ろの婦人を、  
 エホバ外の中にお投いれ、  
 鉛の錘を、  
 ろの舂の口に投か、  
 ぐらせたり、  
 我また目を舉て觀し、  
 婦人二人出きたれり、  
 之に、  
 靴の翼のごとき翼ありて、  
 ろの翼風を、  
 含む、  
 彼等、  
 ろの、  
 エホバ外を、  
 天地

の間、何處へ携へゆくあるやと、言ける。あ、彼、我に言ふ。ナルの地に、之、ため、家を、建んと、と、あり。是は、彼處に、置ら、さて、ろの、臺の、上に、立ん

我また、目を、舉て、觀し、し、四輛の、車二の、山の、間より、出きた、り、ろの、山は、銅の、山あり、第一の、車に、赤馬を、着け、第二の、車に、黒馬を、着け、第三の、車に、白馬を、着け、第四の、車に、白黒ある、強馬を、着く。我す、あり、ち、我に、語い、ふ。天の、使に、問て、我主よ、是等、の、何、ある、や、と、言ける。に、天の、使、こ、た、へ、て、我、あ、言ふ、是、の、四、の、天、風に、して、全、地、の、主、の、前、より、罷り、出、たる、者、あり、黒馬、の、北、の、地、を、さ、し、て、進、ま、り、行、き、白馬、の、後、に、從、ふ、又、白、黒、馬、の、南、の、地、を、さ、し、て、進、み、ゆ、き、七、強、馬、の、進、ま、り、出、て、地、を、徧、ね、く、行、め、ぐ、ら、ん、と、す、彼、汝、ら、往、き、地、を、徧、ね、く、め、ぐ、と、と、言、た、ま、ひ、け、れ、バ、則、ち、は、ち、地、を、行、め、ぐ、れ、り、人、彼、れ、わ

れを呼て我告て言ふ此北の地に往る者等の北の地あて我書を安んず○エホバの言われに臨めり曰く汝の四勝人の中の者ヘルダイトビヤあまびエダヤより取こをせよ即ちろの日に汝彼らガバピロンより歸りて宿りをセハニヤの子ヨシヤの家に到りて金銀を取て冠冕を造りヨザクの子ある祭司の長ヨシエアの首にこれを冠らせし彼に語りて言へし萬軍のエホバ斯言たまふ視よ人ありろの名を核せいふ。彼あこれの處より生いでよ。エホバの宮を建ん。即ち彼者エホバの宮を建て尊榮を帯びろの。侍に坐して政事を施しろの位ありて祭司どもらん此二の者の。間に平和の計議あるべし。倍まつたろの冠冕のヘレムトビヤエダヤあまびセバニヤの子ヘンの記念のため之をエホバの殿に納むべし。遠き處の者等來りてエホバの殿を建ん。而して汝ら萬軍のエホバの我を遣はしたまひしるを知るにいたらん。汝らもし

汝らの科エホバの聲に聽志たむは是のごとくなるべし  
 四日にエホバの言セカリヤに臨めりニベテルかの時レヤレセル  
 レケンメレクあよびらの從者を遣はしてエホバを和めさせニ加  
 つ萬軍のエホバの室にをる祭司に問しめ且預言者に問志めて言  
 けらく我今まで年久しく爲きたりしごとく尙五月をもて哭きか  
 つ齋戒すべきやとロこよにおいて萬軍のエホバの言我に臨めり  
 云くニ國の諸民あよび祭司に告て言へ汝らハ七十年のあひだ五  
 月と七月とに斷食しかつ哀哭せしむるの斷食せし時果して我ハ  
 むらひて斷食せしや汝ら食かつ飲の全く己のためふ食ひ己の  
 ために飲あらずやセ在昔エホサレムあよび周圍の邑々人の住ふ  
 ありて平安ありし時南の地あよび平野にも人の住ひをりし時に  
 已往の預言者によりてエホバの宣ひたりし言を汝ら知ざるや○

ハエホバの言セカリヤハ臨めり云くハ萬軍のエホバハらく宣まへ  
 り云く正義審判を行ひ互ハ相愛し相憐れり寡婦孤兒旅客あ  
 よび貧者を虐たぐる勿れ人を害せんと心に圖る勿れと然るに  
 彼等の肯て耳を傾けず脊を向け耳を鈍くして聽せず且その心を  
 金剛石のごとくし萬軍のエホバの御靈をもて已往の預言者  
 自由て傳へたまひし律法と言詞に聽志たむのきりききをもて大  
 なる怒萬軍のエホバより出て臨めり且彼かく呼のりたきをも彼  
 等聽きりき共ごとく彼ら呼るども我聽ヒ萬軍のエホバこれを  
 言ふ言我かれらをろの譴ざる諸の國ハ吹散すべし其後あてこの  
 地の荒て往來する者あきに至らん彼等かく美しき國を荒地とる  
 す

一萬軍のエホバの言われに臨めり曰くニ萬軍のエホバの  
 言たまふ我レオンのため甚いだしく心を熱して妬く思ひ大



ある 怨怒を起して之がために妬く思ふニエホバかく言たまふ今  
 我レオンに歸れり我エルサレムの中に住んエルサレムの誠實あ  
 る邑と稱へられ萬軍のエホバの山に聖山と稱へらるべし萬軍  
 のエホバあく言たまふエルサレムの街衢に再び老たる男老た  
 る女坐せん昔年高くして各々杖を手に持べしエまたらの邑の街  
 衢に男の兒女の兒滿て街衢に遊び戯むらん萬軍のエホバか  
 く言たまふこの事ろの日に此民の遺餘者の目に奇といふども  
 我目に何の奇きこと有んや萬軍のエホバこれを言ふ七萬軍のエ  
 ホバかく言たまふ視よ我わが民を日の出る國より日の入る國よ  
 り救ひ出しんかれらを携へ來りてエルサレムの中に住しめん彼  
 らの我民となり我の彼らの神どもりて其お誠實と正義に居ん  
 萬軍のエホバかく言たまふ汝ら萬軍のエホバの室ある殿を建ん  
 とて其基礎を置たる日に起りし預言者等の口の言詞を今日聞く

者よ汝らの腕を強くせよ此日の先わ人も工の價を得ず獸畜  
 も工の價を得ず出者も入者も仇の故をもて安然ならざりき即ち  
 ち我人々をえて互に相攻めたり然れども今我此民の遺餘  
 者に對すること義の日のごとくあらすど萬軍のエホバ言たまふ  
 ま即ち平安の種子あるべし葡萄の樹の果を結び地の産物を出し  
 天の露を與へん我この民の遺餘者にこそを盡く獲さすべしエ  
 ヌの家におよびイスラエルの家よ汝ら國々の中お咒詛どありし  
 ごとく此度の我あんちちを救ふて祝言どちちを去めん懼るよ勿き  
 汝らの腕を強くせよ萬軍のエホバあく言たまふ在昔汝らの先  
 祖我を怒らせし時我こそに災禍を降さんと思ひて之を悔ざり  
 き萬軍のエホバこれを言ふま是のごとく我また今日エルサレム  
 とエダレ家に福祉を降さんと思ふ汝ら懼るよ勿き汝らの爲べ  
 き事い是あり汝ら各々たがひお眞實を言べし又汝等の門にて審

判せる時ハ眞實を執て平和の審判を爲すべし老汝等すべて人の災  
 害を心お圖る勿れ偽の誓を好む勿れ是等の我を惡む者あり  
 軍のモホバ言たまふ○六萬軍のモホバの言われに臨めり云く  
 の斷食のへつてユダの家の宴樂とあり欣喜とあり佳節とあるべ  
 し惟ふんちら眞實と平和を愛すべし三萬軍のモホバかく言たま  
 ふ國々の民および衆多の邑の居民來り就ん三即ち其の邑の居民  
 往てその邑の者お向ひ我等すみやかに往てモホバを和め萬軍の  
 エホバを求めんと言んに我も往べしと答へん三衆多の民強き國  
 民エルサレム來りて萬軍のモホバを求めモホバを和めん三萬  
 軍のモホバ言たまふ其日に諸の國語の民十人おてユダヤ  
 人一箇の裾を拉へん即ち之を拉へて言ん我ら汝らと與ふ往べし  
 其の我ら神の汝らと借ふいさすを聞たればあり

第八章

の止まる所なりエホバ世の人を呑みイスラエルの一切の支派を  
 呑みださへむるなりニ之に昇するハマテも然りツロ、レド、  
 あそだ俗削ければ同じく然るべしエツロの自己のためお城廓を  
 構へ銀を座のおどくお積み金を街衢の土のごとくに積り  
 主ふれを攻取り海おて之ダ力を打はらばしたさふべし是の火に  
 て焚うせんエアレクロンみれを見て懼れガザもこれをを見て太  
 慄ふエクロンもその望む所の者辱めらるるに因て亦然りガザ  
 に王絶えアレクロンに住者あきに至らんハアレドありま  
 た雜種の民すまん我ベリレタ人お誇る所の者を絶べし我これ  
 タ口より血を取除き之が齒の間より懼むべき物を取除らん是も  
 遺りて我等の神に歸しユダの牧伯のごとくに成べしまたエツロ  
 ン、エプス人のごとくにあるべし我わが家のためには綱を張て

敵軍に當り之をして往來するものと無らぬ者かさねて追  
 ること無むべし我いざ我目をもて親ら見ればあり○ハ  
 女よ大に喜こべニルサレムの女よ呼はれ視よ汝の王汝に來る  
 の正義して拯救を賜はり柔和ふして驢馬に乘る即ち花驢馬の子  
 ある駒に乗るあり我ニフライムより車を絶ちエルサレムより  
 馬を絶ち戰争弓も絶るべし彼國の民も平和を論さん其政治の  
 海より海に及び河より地の極におよぶべし汝にのいてのまた  
 汝の契約の血のために我かの水も抗より汝の被俘人を放ち出  
 さん望を懐く被俘人よ汝等城に歸き我今日もあは告て言ふ我  
 があるす信して汝等に責ふべし我ニダを張て弓とみしニフラ  
 イムを矢とみして之をつひへん○ハ我汝の人々を振起して  
 キリシヤの人々を攻しめ汝を去て大丈夫の劍のごとくあらしむ  
 べし言ニホバてれダ上に顯はれてるの箭を電光のふとくに射い

だしたまへん主ニホバ喇叭を吹ならし南の暴風に乘て出來ま  
 ん萬軍のニホバ彼らを護りたまへん彼等の食ふことを爲し投  
 石器の石を踏つけん彼等の飲こどを爲し酒に酔ふことを爲し  
 舉ん其これ盈さるるふとみ血を盛る鉢のごとく祭壇の隅のご  
 とくなるべしま彼らの祠ニホバ當日お彼らを救ひろの民を羊の  
 とどくに救ひたまはん彼等の冠冕の玉のごとくありて其地に  
 輝くべしまの福社の如何計や其美麗の如何計やや鞍物の童  
 男を長ぜま新酒の童女を長ぜま  
 一汝ら春の雨の時に雨をニホバに乞へニホバ電光を造り  
 大雨を人々に賜ひ田野に於いて草薺を各々に賜ふべしニ夫テラ  
 ヒムに空虚き事を言ひ下筆師の見る所眞實あらす夫テ虚偽  
 の夢を語る其愚むる所の徒然あり是をもて民の羊のごとくお速  
 ひ牧者あきにて困て惱むニ我牧者にむかひて怒を發す我牡山羊を

罰せん。萬軍のエホバの莊なるユダの家を罰之をしてその美  
 しき軍馬のごとくあらしめたまふ。石彼より出で釘かれより  
 出で軍弓かきより出で宰たる者みあ齊く彼より出ん。彼等戰か  
 ふ時勇士のごとくおして街衢の泥の中に敵を蹂躙らん。エホバ  
 かきらとよもに在せば彼ら戰かん。馬も驕る者等するらん。魂を  
 抱くべし。我ユダの家を強くし。セフの家を救はん。我かれらを  
 憐むる故に彼らを去て歸り住まめん。彼らに我を樂らせし事あ  
 ぐ如くあるべし。我れ彼らの神。エホバあり。我らに聽せし事  
 フライム人の勇士あ等しく。酒を飲たるごとく心お歡ばん。其  
 子等の見て喜び。エホバに因て心に樂まん。我かれらに向ひて  
 きて之を集めん。其れ我これを贖ひたまへり。彼等の昔殖増たる  
 ごとくに殖増ん。我かれらを國々の民の中に播ん。彼等殖増たる  
 において我をおぼへん。彼らに其子等ともお生み。ぐらへて歸り

來るべし。我かれらをエシブトの國より携へかへり。アッスリア  
 より彼等を集め。ギレアドの地およびレバノンに彼らを携へゆか  
 ん。その居處も無きはなるべし。彼眼難の海を通り海の濱を擊  
 破りたまふ。ナイルの淵の盡く酒る。アッスリアの傲慢の身くせら  
 れ。エシブトの杖の移り去ん。我彼らをして。エホバに由て強くあ  
 らまめん。彼等れ。エホバの名をもて歩まん。エホバこれを言たまふ  
 ば。レバノンよ。汝の門を啓き。火を去て。汝の楡樹を焚き去め  
 よ。楡よ。叫べ。楡樹は倒さ。威嚴樹のろみあれ。色たり。パレヤンの楡  
 よ。叫べ。高らかにある林の倒れたり。牧者の叫ぶ聲あり。其榮るこあ  
 り。色たれ。バあり。猛き獅子の吼る聲あり。ホルダンの羆ろこあ  
 たり。バあり。我神。エホバかく言たまふ。宰らるべき羊を救へ。之  
 を買ふ者。之を宰ることも罪なし。之を賣る者。言ふ我富を得れば  
 エホバを祝すべし。其牧者もよきを惜まざるなり。エホバ言たま



まふ我あさねて地の居民を惜まじ視よ我人を各々の鄰人の手  
 小付しろの王の手小付さん彼ら地を荒すべし我こそを彼らの手  
 より救ひ出さじ我するを其宰らるべき羊を牧り是は最も憫  
 然ある羊あり我みづら二本の杖を取り一を思ひ名け一を結ど  
 名けてろの羊を牧り我一月に牧者三人を絶り我心小彼らを厭  
 ひしが彼等も心小我を悪めり我言り我は汝らを飼之じ死者  
 の死に絶る者絶れ遺る者互にろの肉を食ひあふべし我  
 思といふ杖を取て之を折り是諸の民立し我契約を廢せんどて  
 ありき是はろの日小廢せられたり是にあいてかの我に聽えた  
 るひし憫然なる羊は之をエホバの言ありしど知り我あれらふ  
 向ひて汝等もし善と視なば我價を我に授けよ若あらすを止め  
 よと言けれバ彼等すな之銀三十を權りて我價とせりエホバ  
 我小言たまひけるは彼等小我ガ估價せらざしろの善價を商人に

投あたへよと我すあそち銀三十を取てエホバの室小投いれて陶  
 人に歸せまむ我また結といふ杖を折り是ユダとイスラエルの  
 間の和好を絶んとてありき○まエホバ我小言たま之く汝また愚  
 ある牧者の器を取れ我視よ我地小一人の牧者を與さん彼は亡ふ  
 る者を顧みず遠へる者を尋ねず傷つける者を醫さず健剛なる者  
 を飼えず肥たる者の肉を食ひ且ろの蹄を裂ん其羊の群を棄る  
 惡き牧者之禍あるある劍ろの腕小臨みろの右の目に臨まん其腕  
 は全く枯へろの右の目は全く盲れん  
 一イスラエルにかまはるエホバの言詞の重負エホバ即  
 ちち天を舒べ地の基を置衆人の内の靈魂を造る者言たまふニ視  
 よ我エルサレムをまてろの周圍の國民を跟跡之する杯とあらま  
 むべしエルサレムの攻圍する時是のユダにも及むんニ其日に  
 の我エルサレムをまて諸の國民に對ひて重石とあらまむべし之

を持擧る者ハ大傷を受ん地上の諸國みあ集まりて之に攻寄べし  
 エホバ言たまふ當日に我一切の馬を撃て敗かせろの騎手を  
 撃て狂はせん而して我ユダの家の上に我目を開き諸の國民の馬  
 を撃て首になすべしユダの牧伯等ろの心の中お聞んユダサレ  
 ムの居民之ろの神萬軍のエホバ由て我力とあるべしと當日  
 に我ユダの牧伯等を去て薪の下にある火盤のこどく麥束の下  
 にある炬火のこどくあらまひべし彼等ハ右左にひかひろの周圍  
 の國民を盡く撲んユダサレム大ハなはユダサレムにてろの本の  
 處に居こどを得べしユダサレムゴユダの幕屋を救ひたまん是  
 ダビテの家の榮あよびユダサレムの居民の榮のユダお勝るふど  
 無らんためたり當日エホバユダサレムの居民を護りたまん  
 彼らの中の弱者もろの日にダビテのこどくあるべしまたダ  
 ビテの家ハ神のこどく彼らに先だつエホバの使のこどくあるべ

しユろの日に我ユダサレムお攻きたる國民をこどく滅ぼ  
 すこどを務むべし我ダビテの家あよびユダサレムの居民お思  
 慮と祈禱の靈をろゞだん彼等ろの刺たりし我を仰ぎ觀獨子の  
 ために哭くおこどく之のためお哭き長子のためお悲しむること  
 く之のためお痛く悲しまんユろの日にユダサレムに大ある哀  
 哭あらん是ハメギドン谷あるハダデリンモンお在し哀哭のこ  
 どくあるべし國中の族あハダデリンモンお在し哀哭のこ  
 の家の族別れ居て哀哭きろの妻等別れ居て哀哭ナマンの家の族  
 別れ居て哀哭きろの妻等別れ居て哀哭かんレビの家の族別れ  
 居て哀哭きろの妻等別れ居て哀哭きレメイの族別れ居て哀哭  
 ろの妻等わられ居て哀哭かんユろの他の族も凡て然りするんち  
 族あハ別れ居て哀哭きろの妻等別れ居て哀哭かんユ  
 一ろの日罪と汚穢を消むる一の祭ダビテの家とユダ

レムの居民のために開くべし。萬軍のエホバ言たまふ、其日に我地より偶像の名を絶つる予き重ねて人に記憶らるること無らむべし。我また預言者よび汚穢の靈を地より去まむべし。人もしなは預言することあらば其生の父母も地に言ん汝の生べからず。汝のエホバの名をもて虚偽を語るありと而してその生の父母こそび預言しをるを刺ん。その日に預言者等預言するに方りてその異象を差ん。重て人を欺むらん。ために毛衣を纏ひし。彼言ん我の預言者にあらす地を耕へす者あり。即ち我の若き時より人に買れたり。若これに向ひて然らば汝の兩手の間の傷の何やと言あらば。是の我が愛する者の家にて受たる傷ありと答へん。○七 萬軍のエホバ言たまふ。劔よ起て我牧者我伴ある人を攻よ。牧者を撃て。然らばその羊散ん。我また我手を小き者等の上に伸べし。エホバ言たまふ。全地の人二分り絶れて死に三分の一の

中に遣らん。我らの三分の一を携さへて火にいれ。銀を熬分るとく。之を熬分け金を試むること。く。之を試むべし。彼らわが名を呼ん、我これおてたへん。我ふれの我民ありと言ん。彼等またエホバの我神なりと言ん。

第十四章

一 視よエホバの日来る、汝の貨財奪はれて汝の中あて分たるべし。我萬國の民を集めてエルサレムを攻撃せめん。邑を取れ。家の掠められ、婦女に犯さき。邑の人の半に擄へられてゆかん。然ととの餘の民の邑より絶き。その時エホバ出きたりて其等の國人を攻撃たまん。在昔の軍陣の日に戦たまひしごとくあるべし。其日にエルサレムの前あ當りて東にあるところの橄欖山のの上に彼の足立ん。而して橄欖山の真中より西東に裂て甚だ大なる谷を成し。その山の半に北に半に南に移るべし。汝らの我山の谷に逃いらん。其山の谷の阿サルにまで及ぶべし。汝らのエホ

の王ウロヤの世お地震を避て逃しごとくお逃ん我神エホバ來り  
 たまへん諸の聖者なんちとよもなるべし。その日お光明あか  
 るべく輝く者消うすべし。七鼓に只一夜にもあらず夕暮の頃に明くなるべ  
 きたまふ是の晝にもあらず夜にもあらず夕暮の頃に明くなるべ  
 し。その日に活る水エルサレムより出るの半。東の海にその半  
 の西の海も流さん。夏も冬も然あるべし。エホバ全地の王とあり  
 たまへん。其日お只エホバのみ。只その御名のみあらん。全地  
 のアラバのごとくありてゲバよりエルサレムの南のリンモンま  
 での間のごとくなるべし。而してエルサレムの高くありてその故  
 の處お立ちベニヤミンの門より第一の門の處お及び隅の門にい  
 たり。ハナニエルの戊樓より王の酒樽倉までお渉るべし。その中  
 にお人住ん重ねて呪詛あらしエルサレムに安然に立べし。エ  
 サレムを攻撃し諸の民にエホバ災禍を降してこれを撃あやまし

たまふ。是のごとくあるべし。即ち彼ららの足おて立をる中に  
 肉應れ。目の孔の中おて腐れ。舌の口の中おて腐せん。その日  
 におエホバかきらをとて大に狼狽あめたまへん。彼らに各々人の  
 手を執へん。此手と彼手撃あふべし。猶もまたエルサレムに於  
 て戦かふべし。その四周の一切の國人の財寶金銀衣服あき甚だ多  
 く聚められん。また馬驢駝駝馬あよびその諸營の一切の家畜  
 の蒙むる災禍もこの災禍のごとくあるべし。エホバに攻さ  
 たりし諸の國人の選れる者之みな歳々に上りきてその王ある萬  
 軍のエホバを拜み結茅の節を守るにいたるべし。地上の諸族の  
 中その王なる萬軍のエホバを拜みにエルサレムお上らざる者  
 上にお凡て雨ふらざるべし。例バエシブトの旗もし上り來らざ  
 る時はその上に雨ふらじ。エホバの結茅の節を守りお上らざる  
 一切の國人を撃あやまず。災禍を之お降したまふべし。エシブト



の罪つみ凡またて結むす茅こゝろの節いひを守まもりに上のぼり來きたりさる國くに人の罪つみ是またのごとくな  
るべしま茅こゝろの日ひに馬うまの鈴すずあまでエホバに聖せいとあるさん又エホ  
バの室むろの鍋なべ壇だんの前まへの鉢はちと等おなかるべしまニエルサレムをよびユダ  
の鍋なべと都みやこで萬軍ばんぐんのエホバの聖物せいぶつとなるべしま凡またろ犠牲いけにへを獻けんぐる者もの  
之これ來きたりてこれを取とり其その中なかあて祭肉まつにくを煮にん其その日ひには萬軍ばんぐんのエホバ  
の室むろに最もと早はやカナン人ひとあらざるべし

立教大学図書館



95-91141